# 無縁社会の世相事象のマスコミ報道に接して

以前、当 HP に「『無縁社会 ～無縁死　３万２千人の衝撃～』を見て（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅵ）、2010.02.02.：参照 ）」を掲載した。

この番組の後、放送局には１５００件を超える反響が届き、また、番組を見ながらネット上に書き込みをするツイッター、掲示板、ブログ上で数十万を超える異常な頻度で書き込みがあったとか。
しかも目立ったのは、３０～４０代の働き盛りの世代の書き込みで、自分と社会との繋がりを不安視する訴えるが多かったとか。

自殺者数がここ数年連続して年間３万人を越えることが、自己責任論ではなく社会の問題として行政等がその予防策等に真剣に取り組んでいることはご承知の通りであるが、無縁死が年間３万人を越えるようになったことも確かに社会として真剣に取り組む問題であろうと思う。

社会として取り組むべき問題提起からか、最近の無縁社会の世相事象のマスコミ報道が目にとまる。
例えばある報道では、内閣府による昨年秋の調査では、６０歳以上の４２．９％が、その中で一人暮らしの人の６４．７％が孤独死を身近に感じているとか。

また他の報道では、近年のライフサイクルの変化から、２０年後には女性の４人に一人、男性の３人に一人が「生涯未婚」と推測され、つまり、血縁という側面からの無縁の人が増えることが予想されるよう。

更に他の報道では、医学部生、歯学部生の遺体解剖実習のために献体する登録者は以前は少なかったが、最近では登録希望者が多すぎて登録の制限を始めた大学も出てきているとか。
その増加理由の一つの側面として、「自分が死んだ後に弔ってくれる人もいないから」、「経済的に厳しくて、身内に金銭的な負担をかけたくないから」という人が増えてきているからとか。

無縁社会の問題については先の当ＨＰの記事でコメントを記したが、社会と個人の繋がりが薄れつつある日本社会で必要とされる「絆」の新しい形とはどういうものか、どう考えればいいのか、我々一人一人の生きよう（様）が益々問われる時代にいつの間にか足を大きく踏み入れているような気がする。

「生きるとは、係わり合い、互いに輔け合い、生てていくとはどういうことかを自らに問い続ける活動」であることを、再確認したいものである。

阿部幸泰　　（2010 年 4 月 5 日　記）